

近松用語の二三について

穎原退藏

我が近世の文藝の中で、その註釋的作業が比較的進んで居るのは、芭蕉の俳諧と近松の淨瑠璃とであらう。勿論それはどこまでも、比較的、といふ副詞附きの上での事であるが、とにかく今日我々が芭蕉を読み、近松を読むには、註釋的參考書を得るにさして苦しまない。芭蕉については姑く措き、近松のさうした參考書をあぐれば、何といつても水谷不倒氏の『近松傑作全集』の恩恵を思はずには居れない。自分たちの學生時代に、大學の研究室にあつたあの本は、いつもみんなの引張りだこになつて居た。『大日本國語辭典』に採録された近松の用語なども、同書の解釋によつたものがかなり多いやうであ

る。ついで出た藤井乙男先生の『近松全集』は、本文校定に於いては言ふまでもなく、註釋的研究としてもまた實に劃期的な事業であつた。こゝに始めて近松の全作品に互る註釋が具はつたのみならず、その註釋は全く先人未踏の境地に入つて、學徒の爲に蒙を啓いたものであつた。それから樋口慶千代氏の『近松語彙』も、近松の註釋史上に一の大きな足跡を残すものと言はねばならぬ。

近松の註釋的研究としてあぐべきものはなほ多いであらうが、今はたゞかうして我々が近松を読む上に、先進學者がいかによつた業績を残してくれたかを思へば足る。さうして我々はこれに感謝すると共に、又その不備

を補ふべき責任をも感ぜずには居れない。實際多くの先輩の業績があるにも拘はらず、今日我々はなほ近松の解釋上、幾多の疑義不明の點を持つて居るのである。藤井先生の『近松全集』が出てすでに十年以上になるが、その間先生は絶えず頭註の訂正増補に力を盡されて居る。

而してその成果が再び發表された時、從來の疑義の大部分は一掃されるにちがひない。それにしても註釋の如き事業は、結局多くの人の協力を得ないでは、完全を期し難いものである。縱令僅かに一二の用語に關する事であるとしても、それが若干でも從來の不備を補ひ、少くとも正しい解釋へ導くべき寄與をなすものであるならば、我々はその爲の努力を吝んではならぬと思ふ。その意味で茲にあへて小さな解釋上の問題を提出して見た。

○きつさきはづれ

力にまかせなくぬき身がはづみ、二かいの比丘尼が小がひなに、きつさきはづれにすつばとたつ。(寶永元年、

薩摩歌、中)

近松用語の二三について

此の語の解釋については、從來推定説の外に出るものはなかつた。何分にも「きつさきはづれ」といふ語の用例が、この外には全く提供されて居ないので、随つて適確な解の下しやうがないのである。成程「きつさきはづれ」といふ語は他に所見がないが、

三尺計の刀を拔持て、信玄公牀机の上に御座候所へ一文字に乗よせ、きつさきはづしに三刀伐奉る。(甲陽軍鑑、十下)

この平金が切先へ立むかわんものあらは、さはちをかけてむないたまで、きつさきはづしにふかくと、しの字をかいてやるへいは。(寛文十一年、ぬれほとけ)

の二例に於ける「切先はづし」は、全く同じ語と思はれる。而してこの「ぬれほとけ」のごとき用例から考ふれば、例へば『大辭典』——これが最近の解釋であるから、假にこれを例にとる。——に「斬らうと思つた場所に當らずに、劍尖が外にはづれること」とあるやうな解は當らない事になる。『甲陽軍鑑』の場合は、信玄は致命傷で

なかつたのだから、『大辭典』の解も通用するやうであるが、既に一例でも右の解に全く齟齬するものがある以上、なほ再考すべき餘地が十分にある。況んや右の解は恐らく『薩摩歌』の一例のみによつて下したのであらうから、根據は極めて薄弱である。しかし『甲陽軍鑑』と『ぬればとけ』の二例だけから、直ぐに適確な正解を得る事も出来ない。たゞ「切先、外し」といふ言葉の構成から、用例を参照して考へると、刀の切先の部分は向ふに出て居て、刀身の部分だけで切込む事かと思はれる。即ち相手に肉薄して斬るのである。而して近松の場合、刀は遠方から投げたのであるにも拘はらず、それが接近して斬附けたやうに腕に立つたので、「切先外れ」と言つたのであらう。もとよりこれとても所詮推定説から出ては居ないのであるが、とにかくさう解する事によつて、前掲の三例に通じて支障なき解釋が得られるとすれば、『薩摩歌』の一例だけで下した解よりは、幾分正解に近いであらうと思ふ。

○せんま

姫はずぶふる一の役、敵を討は大この役、とどめをさすはふゑの役、ありやしたつとみうつまなき、せんまの役はまゝたきがいつ見おほへて取なりを、みかはの國の町小路、だい／＼かぐらめづらしと、見る人立のにぎはひも、(享保五年、日本武尊吾妻鑑、五)

此の語について『大辭典』は右の用例を引き、「餼米セシイの訛」と解してある。これは恐らく『近松語彙』の解に従つたのであらう。しかし次に列擧する用例を見れば、到底この解に従ひ難い事が明かである。しかも今直接に「せんま」の語義を解いた資料も知り得て居ないのでから、やはりこれらの用例から歸納的に推測する外はない。よつて繁を厭はず、管見に入つた全部の例をあげて見る。

天神祭…舟だんじりとて、狐つりなどに身のかるい米中衆しゅうがつな渡り、かぐらの狂言、よみ夜よみ、宵宮よみやむと其日二日に貳文取ての物まね萬歳まんざい、或はせんまなどよて隨

分むさぎ男に白粉ぬり、女のかつらかけて、かみ脚女の姿にして出す事也。(享保三年、野傾咲分色拜、三ノ三)

ちやんぎりしきりのだんじりはやす、はだか姿のおもてしろや、たかまがはらあてかみはとんぼのあきつしま、せんまがつよみもこけむして、ひよくどりもおどろかぬ御代をままりのわれなるぞよ。(享保十五年、須藤都源平躑躅、三)

あつたら事に御崎殿、あなたに前髪あつたらば、お鼻に似合たせんまの役。(寶曆十一年、安倍晴明倭言葉、二)

北の町から箱やの手間取、鍛冶やの息子、顔は斑にせんまのみばへ。(寶曆十三年、天竺徳兵衛郷鏡、二)

マアじたいこなたは(前髪姿の醜男に向つて言ふ)京向キの奉公人じやない、大坂へ下らしやれ、祭のせんまによい恰好じや。(寶曆十四年、京羽二重娘氣質、四)

イヤくくくとめやんな小助、あのせんまめ(久松をさす)仕様が有ル。(安永九年、新版歌祭文、油屋の段)

壇 尻 引

コシノソイ困怪艱業今チニ墮地、セシヤガ仙馬放氣欲上天、(天明七年、黒珂近松用語の二三について)

箱) あほうらしい 女房の帯をする千馬。(文化、冠附壽貴之寶)

以上の諸例によつて、讀者はすでに「せんま」の何たるかは、ほど想像する事が出来るであらう。こゝで辭書風に定義を與へるならば、「大阪の天神祭などで、神女に扮し鼓をうち滑稽な眞似をする者の稱」とでも言つたら宜いであらう。そして更に詳しく説明すれば、この役をする者は大概にきび面の前髪で、それが所斑に白粉を塗り、女の恰好をしていやみたつぷりな身振で人を笑はせたものであつた。近松の場合では、一番御多福らしい飯焚にこの役を勤めさせたわけである。それで語義はほど明かにし得たと思ふが、語源についてなほ考へるに、せんまはかののちま・そらま等の類語ではあるまいか。それに關聯して思ひ浮べられるのは、やはり近松の中に見える。

但おぐしの御用なら、大いちやう・中いちやう・立かけ。

なげかけ・千松わけ。(寶永三年、加増會我、一)

とある千松髻の事である。この髻の名はなほ

月代剃つて髮結て、今は千松髻の多い。(元祿十七年、落

葉集、踊音頭浮世法師)

せんまつわけに結ぶ櫛は、あすの水櫛つげの櫛。(寶永・正
徳頃、取櫛亂れ髮道念ぶし)

等の用例に見え、その實體は分らないがとにかく男子の
結髮の稱である。而してこの千松髻を好んで結ぶ男が、前
髮上りの箱屋の手間取や鍛冶屋の息子に多かつたので、
さうした連衆の渾名を千松といひ、更にせんまとなつた
のではあるまいか。この千松髻との關係はあまりに臆測
に過ぎるが、いづれにせよせんまはのろま・そろまに
類した一種の他を輕侮する稱であつたらう。『新版歌祭
文』では全く前髮の久松を罵る詞として用ひられて居る
が、それが實は却つてせんまの原義に近いのかも知れな
う。

○さそ

今わかには御らんじて、是ぞげんじのうぢ神に我かど出の吉
さうと、御手をあはせ給ひければ、あにを見まねにとわ
かもうしわかも、はゞ君のちぶさのうへに手をあはせ、さ
そつくとあいらしさ。(元祿三年、烏帽子折、二)
わづか二歳の若君を、何になれとてすてはて、いづくへ行
かせ給ふぞや、待たせ給へと先に成、立塞がれば爲若は、
愛するごとく父上の顔を見あげて手を出し、さそつくと
の給へば、(元祿十五年、一心五戒魂、三)

これは右の二例だけでも知られる通り、幼兒の語であ
る事は明かであるが、言葉が元來どういふ意を示し、又
いかなる場合に用ひられるかは明かにされて居ない。こ
の語も用例は決して乏しくない。今見當つただけをあげ
ても

おいとま申せば手を出して、さそふくとあひらしさ。(正
徳三年、河内國姥火、三)

今朝出で給ふ其時まで、さそつくと愛らしく、いたいけ
なりしものを、(享保三年、三井寺開帳、上)

わらんべが歸るさそつとやさらはのこへ。(享保十五年、信

州姥捨山、四)

是なふ今のと、様が鎌倉へござらしやる、めてたふ頼而お
歸りと、さそふくしてたもふ、其次手にもとのと、様、
貌の見おさめ見せおさめ、永いさらばのさそふをしや。(享
保十七年、壇浦兜軍記、四)

そんならお暇申しよ、…よういてごんたと三ツ子に、
さそふするのも早仕舞、追従してぞ歸りける。(寶曆四年、
小野道風青柳硯、三)

等の數例を示す事が出来る。而してこれらの用例から歸
納すれば、多く今日の「さよなら」といふべき場合に用
ひられる言葉であり、又手を合せるとか、手を出すと
かの動作を伴つて居る事が知られる。それについて参考と
なるのは、

茶輪子のすがり療治が花に來て

秀可

庭で又手の杉葉ふみわけ

支垂

(寶永二年、乙酉十歌仙)

といふ例である。即ちこれは幼児が「さそふく」をす
る場合、在右の手を組合せるやうな動作をする事から、

近松用語の二三について

又手をサソウと言つたものと推定されるのである。たゞ
しサソウといふ言葉そのものは、勿論又手を意味するも
のではない。一體この語は前掲の諸例に見る如く、淨瑠
璃にのみ用ひられてあつて、その他の小説・俳諧等に於
ける用例が見當らないのである。勿論これは管見の故も
あり、決して即断は出来ないのであるが、少くとも淨瑠
璃用語として最も多く用ひられたといふ事だけは確言し
得よう。而してその事は、この語がかなり古風な感じを
もつものでなかつたかを思はせる。淨瑠璃では百姓土民
などの言葉を現はす場合、よく終に「てや」といふ一種
の感嘆の助詞を附けるが、これは他の小説などではあま
り見ない事である。つまり淨瑠璃では「てや」が百姓語を
現はす一の形式となつた觀がある。「さそう」もまた同様
な意味で、淨瑠璃に於ける幼児語として特に多く用ひら
れるやうになつたのかも知れない。さう推定すると、「さ
そう」はやはり室町期からあつた言葉で、「さ候ふ」の轉
訛だとする説が最も穩當のやうである。いはゞ最初は「合

「點々」といふ程の意であつたのが、幼児の人に挨拶する時の言葉となり、又それに手を組むやうな動作をも伴ふやうになつたのであらう。

幼児語の如きはその性質上、比較的時代の變遷が少い筈ではあるが、それでもすでに「てうちく、あはく」等といふ子供のあやし方は、現代人の耳には全く遠い。貞門談林の古俳諧に屢、散見する「あいやのぼろく」といふ幼児語なども、

子をつるく雉はあいやのほろく哉 季吟(崑山集)
 小春たつあいやのほろく時雨哉 信元(夢見草)
 春立てあいやぼろく雨の足 宗隆(佐夜中山)
 手引子もどれあいやのほくら盆 頼治(遠近集)

月前雨

あゝいやのほろく降や月の雨 貞則(續山井)
 今朝よりいさあいやのほろく若夷 芳之(筑紫海)
 伯父さままではあいやほろく

渡邊の綱かほしくは買てやろ

(西鶴大失敗)

等の數多い用例を見れば、當時盛んに用ひられた言葉で

あるにちがひないのだが、天和貞享以後の文獻からは一も見出されない。わづかに元禄四年刊『常陸帯』にあげた俳諧用語の中に、「愛世母踏々々」とあるだけである。

——勿論この漢字は宛字にすぎない。アイヤはやはり歩行で、ポロくは調子をとる無意味に添へた語であらう。「あんよは上手」ぐらゐの意か。——だから「さそう」も淨瑠璃には用ひられながら、すでに都會などの現實の用語としては亡びて居たのかも知れない。

○田から井

たがひにいんぐはをさらし屋のうすからきねとは此こと、
 まんまと法然上人があなたの十念さつかり、しよわけの五
 十相傳うけ。(寶永元年、薩摩歌、上)

これは前後の關係上猥褻の意を含むものの如く考へられる爲か、従來の註釋には故らに敬遠して觸れてないものが多い。たゞ『近松語彙』のみが、その猥褻な比喩たる事を明かに述べて居る。成程『薩摩歌』の一例のみについて考へると、その解釋は無理もないのであるが、用例

を今少し汎く見ると、この諺が何等解釋に遠慮すべき性質のものでない事が分る。

易事じやが是(金をさす)が御座らぬといへば、其はわしがさはいしませう、よこ町の笹屋へいかんせと云、夫はうすからきねじや、追付かねもふけてといひさして出る。(元祿十五年、女大名丹前能、三)

これはあんまりく
正眞の本にうすからきねへなり(寶永五六年頃、蓬萊山)

どうもいはれぬく

念へとは白から杵よ若しゆさま(正徳二年、さすの柳子)

就いては去年十月より、今月迄の養料かるが方よりくれませぬ、それ故下り聞きますれば、御自分も御身代今はすつきり祐成にて、宛行は扱て置き、かるが世話になり給ふと、聞いては白から杵ぢやまで。(正徳五年、傾城思升屋、下)

敵をうたんと思ひしに、是はおのく手をおはれし、あちらこちらの大明神、杵から白杵の八郎維信。(正徳六年、曾我鎌倉飛脚、五)

近松用語の二三について

第一例は七助といふ男が女郎を揚げる金が無いと言ふので、霧野といふ女郎がその金を工面してやらうと言つたのに對する言葉である。男が遊女から揚代を貰ふといふのが「白から杵」なのである。第二例はこれだけでは見當のつけやうがないが、「これはあんまり」といふ前句によつても、「白から杵」が案外な事、正當でない事等を意味する事は窺はれる。第三例は念者から若衆に望むべき事を、若衆の方から「思つてくれ」と口説かれるのだから、誠にどうも言はれぬ程有難いのである。第四例はかるといふ女を世話してやる筈の男が貧乏になつて、却つてかるから世話を受けるといふ場合。第五例は「あちらこちらの大明神」とある通り、事の反對になつた意を含んでゐる。たゞ苗字が白杵であるため、「杵から白」と無理な掛詞にただけである。

以上五つの例に於ける用法から考へて、「白から杵」が「寺から里」などいふに同じく、すべて物事の逆になつた場合にいふ諺である事が分る。近松の場合についていへ

ば、十念を授け五重相傳をするのは法然上人の方であるべきに、その法然上人が彼方から十念を授かり五重相傳を受けたのだから、正に「白から杵」なのである。かう解釋がついて見ると、その間猥褻な意味など少しも含んで居ない事は明かであらう。だが「白から杵」が何故さうした意味の諺に用ひられるやうになつたか。それについては自信ある説明は出来ないが、強ひて臆説を立てるならば、あるいは語源的な所に男女を象徴する意味があるのかも知れぬと思ふ。即ち杵が男、白が女を象徴するので、本來事は男から女へ働きかけるべきものであるのに、女から男——白から杵——では逆になるといふのはあるまいか。假に語源的の説明がさうであるとしても、諺の意味としては勿論少しも説明を憚るべき性質のものではない。

〇ほてくるし

どうもならぬとふところに、手をさし入てできつけは、ア、ほてくるしはなさんせ。(寶永元年、薩摩歌、上)

世繼とやらいふ女、惟茂様を我物がほにほてくるし、此長文。(寶永六年、梶狩飯本地、一)
手付にちよつとほてくるし、事御めんく、半兵衛様も氣をお通しと、べつたりだき付。(享保七年、心中宵庚申、上)

此の語は特に難解といふべきものではないが、從來の説は多く物類稱呼や倭訓栞に據つて、腹黒しせくろの意に出るものと解し、例へば『大辭典』には「(一)腹黒し。腹ぎたな。」「(二)あつかまし。甚だ無遠慮なり。甚しく戯れすぎたり。」とあつて、「(三)の部に『薩摩歌』以下二三の例を引いてある。しかるにこれを實際の用例について見ると、腹黒し・腹ぎたなし等の意に當るものは一もあげない事が出来ないのである。假に語源が腹黒しせくろであつたとしても、事實上(一)の意に用ひられたものがないとすれば、語解としては(二)だけをあくれば宜い筈である。のみならず(三)の解も誤つて居るのではないが、それだけではこの語の含む特別な感じを十分現はし得たものとは

言へない。尤も辭書としては簡略に従はねばならぬから、この程度の解でも止むを得ないかも知れぬが、近松の註釋として説く場合には、これでは決して満足されな
いであらう。

此の語は江戸時代の初期から末期に亙つて用ひられて居り、方言としては恐らくなほ今日も生きて居るかと思はれる。而して古く俳諧の作法書たる、『久留流』(寛永

安三)に、

ほてくろしい、戀也。

と見え、その後の俳諧作法書類の中にも同様な説明をしたものが少くない。それでこの語が戀に關した意味をもつものである事は知られるが、その意味については詳しく説明したものがない。寛文十一年刊『蛙井集』戀の詞の條に「膨轉苦勞敷」と漢字を宛ててあるけれども、この漢字は全く當字に過ぎないので、膨れるとか轉ずるとかいふ意を示すのではない。やゝ後世の俳書ではあるが、寶曆三年の『笠纏輪』に初めて

近松用語の二三について

ワルジャレニテイヤラシキ者ヲ、ホテクロシイヤツト云也。

と説明されて居る。即ちさうした悪じやれやいやらしさの中に戀の意味が籠つて居るので、それは前掲の『薩摩歌』『梟狩劍本地』・『心中宵庚申』の三例によつてもほゞ推察されるであらう。更に念の爲若干の例をあげて見る。

何と忠兵衛はいやにして新七殿がいとしいとや、おぼが前にてほてくろしい、見めよう生れつゝたゆへ、人がほれる

と思ふかや。(正徳三年、傾城三度笠、上)

山家に似合ぬ二皮目で、京白粉もたくさんなど、いはぬ計ななりかつかう、いやらしいほてくろしい。(享保六年、三輪丹前能、四)

道ならたつた四五里も来て、あしがいたむかさすろかとは、あんまりでほてくろしい。(享保十六年、本朝五翠殿、二)

青二才にして彌助と名をかへ、此間はほてくろしき聲ぜんさく。(延享四年、義經千本櫻、三)

あふたびごとにくどけ共、びんくとはねまはる、其じや
 馬がなをうまい、けふはぜひ共よいへんじ、聞せてたも
 とほてくろしき。(寶曆十一年、古戰場鐵懸松、一)

扱ほてくろしき書イたり、殿の御執心をかけられし女
 に不義の證據。(明和七年、萩大名傾城敵討、三)

なほ用例は非常に多く見當るが、今便宜淨瑠璃だけから
 例をとつて見た。而してこれらの諸例を通じ、現代語に
 譯すべき適當な言葉を求めるならば、まづ「厚かましい」と
 といふのが最もよくあてはまるやうである。即ち『大辭
 典』の「」の解は極めて適切だと言つて宜い。しかも實
 は單に「厚かましい」だけで意を盡してない事もまた明
 かである。試に辭書風な説明を下すならば、「情事につ
 いてしつこくいやらしいさま」などとすべきであらう。
 たゞし此の語は常にさうした戀に關した場合のみ用ひら
 れたものであるかと言へば、それは必ずしもさうでな
 い。古い頃の用例では、

此土器おもひさしにせよとの仰を蒙り、しはらく思案せし

が、殿様へ獻たらんもなにとやらんほてくろし、汝(自分
 の子をさす)にまさりて思ふ人もなしといひて、土器を(子
 に)さしけり。(備前老人物語)

おもふまゝにはいはれさりけり
 我なからほてくろしき身の譽(寛永二十年、油粕)

等の如く、むしろ單なる「厚かましい」の意に用ひられ
 たものが少くない。又後世に至つても、このやうに戀の
 意に關しない「厚かましい」だけの意の用例は、比較的
 少數ではあるがかなり見出される。よつて思ふに、この
 語の語源は姑く措き、語義はもと單に「厚かましい」の
 意であるが、後に特に戀に關して用ひられる事が多くな
 ったと見るべきであらう。だから語義の説明としては、
 一往「厚かましい」と解した上で、更に「特に戀の意に
 關して用ひられることが多い。即ち情事にしつこくいや
 らしいさまに言ふ」と言つたやうな附説を加へたら、ま
 づほと要を得た解釋とされよう。

ほてくろしは僅かにその一例であるが、このやうに従

來の説が必ずしも誤つて居るのではないが、しかも決して十分な解釋とは言へないものはかなり多い。それは結局多くの用例を集めた上で、解釋を下さなかつた爲の不備に外ならない。例へば西鶴の『世間胸算用』巻五に

夜は門の戸をしめ置て、てつちかふ碓を助てとらせ、足も大かたは汲たての水で洗ふほとに氣を付けられ共、これかやあをちひんぼうといふなるへし、又それほとにあきない事なくて、いよく日なたに氷のこし。

とある「煽ち貧乏」の如きも、從來西鶴の註釋類を始め、一般の國語辭書などで解して居る所は、大體首肯さるべきものである。けれどもそれらの説が、すべて右の西鶴の一例だけをあげるに止まつて居る爲、語解としては極めて肝要の點が逸せられて居る憾みがある。それは左の諸例を検討する事によつて、おのづから納得されるであらう。

かせく人じやといへばあをちひんぼうじやといふ。(寛文年間、三八論語)

近松用語の二三はりこい

果報はねてまてとあれば、さのみ人にすぐれて稼べきにもあらず、かならずあをち貧乏といふ事にて、中く立身は成がたし。(正徳三年、日本新永代藏、五)

いつみても情の出るおか様、それではなくは銀も出来まじといふに、けらく笑して、あのおつしやる事は、世にいふあをちひんぼうも身の上にあたり、働く身は雑水成ル物をくふてはゐられず。(正徳六年、分里艶行脚、一)

朝は星をいたゞきて起き、夜は星を見ても休まず、晝夜をわかず持て漸々夫婦の口をすぐれども、いつの極にも足る事なし、是を世上の人あをち貧乏と云なり。(享保十七年、都莊子)

もはや絮説するまでもなからうが、即ち「いくら稼いでも、扱けられぬ貧乏」をいふのである。而してこの圈點の部分の説明がない限り、この語は完全に解釋されたものとは言へない。――なほ煽ちの語源的な考察もすべきであるが、今は直接必要がないから省略する。――かうして見ると言葉の完全な解釋が、結局出来るだけ多くの實例を集めた後に下さるべき事は、愈、痛切に感ぜられる

のである。

○手振鷺

しだりやなぎに櫻花、はなに鷺手ふり鷺、聲につき手につき、きよろ／＼する間に、文を袂にやれば戻す。(享保二年、聖徳太子繪傳記、三)

随分おちがめにかゝるなど、いひたけれ共侍氣、聲せぬなつの手ふりうぐひすはい／＼、ぶけのいきかたなづまぬ御馬、(享保六年、女殺油地獄、上)

此の語は從來鳴かぬ鷺の義だと解されて居る。手ふりは手ぶらと同じく素手の意であるから、手ぶらの鷺といへば成程鳴かぬ鷺の義と解する外はないやうである。特に『油地獄』の方では「聲せぬ」とまであるのだから、夏鷺の鳴かないのを言ふとすれば極めて適切である。しかしこの二例だけですぐそれを肯定するのも不安心である。例によつて他の用例を少し求めて見る。

春の價や中間奉公

揃ふては手ふり鷺飛て行

かふりしほの目あは雪の山(延寶九年、西鶴大矢數、一)
家老役とて持す鍵梅

三人並ひ手振鷺すつ／＼す

こはい時には念佛も出す(同上、四)

右の二例は共に『油地獄』と同じく手振の御供にかけた作意であるが、後者の「こはい時には念佛も出す」といふ附句が、法々華經と聲を出さない意をきかせて、手振鷺に附けたものとすれば、——「題目も出す」ならばつきりするのだが、——鳴かない鷺といふ解が益、肯定される。そして前者が「かぶりしほの目あは」といふ子供をあやす言葉でつけたのは、手振鷺が嘔の鷺といふのではなくて、まだよく聲が出せない幼鷺を言ふからではあるまいかと思はれる。さうすると『聖徳太子繪傳記』の「聲につき手につききよろ／＼する」といふのも、幼鷺が親鷺などの囀りや動作に従ふさまの形容として自然に解される。又『油地獄』で「聲せぬ夏の」と言つたのは、これは夏になつて音を入れた鷺を、手ぶりの言掛をきか

せる爲、故らに手ふり鶯と言つたものとすれば、別に効鶯と解する事に矛盾はない。なほこの語は、夙く『懷子乳母』の詞寄に「手振鶯」と見えて居り、又

當春大石山丸には立田平馬之丞、手ふりの鶯を持参いたし、小松姫かもん殿と戀のせりふに鳥をにがし、戀かなふ所よし。(正徳三年、役者座振舞、京の巻、坂東彦三郎の條)

等とあつて、江戸時代の前半期には別に珍しい言葉ではなかつたのであらうが、後半期の文獻には全く見えないやうである。

月曜講義のお知らせ

本學學生課主催の下に月曜講義の名で開かれてゐる日本文化講義は、本秋は左記の豫定で萬葉集に關する講義が行はれる。(毎回午後七時より)

十月二日(月) 萬葉佳調讚歎

1、萬葉人のなげき

九日(月) 2、餘情

十三日(金) 3、聲調

本學教授 澤 瀧 久 孝

廿三日(月) 旅人憶民とその周圍

雜誌アララギ主幹 土 屋 文 明

廿四日(火) 人麿の歌について

和歌山高商校長 花 田 大 五 郎

三十日(月) 英譯萬葉集について

外務省囑託 小 畑 薫 其

十一月六日(月) 萬葉集の文化史的位

置 東北帝大教授 阿 部 次 郎